

# 私の仕事

—ぼちぼちでんなあ—

仁愛大学

辻 知幸

今回、「私の仕事」というテーマを頂戴し、堪忍してください、というのが正直なところですよ。テーマをいただいた後、毎日毎日涙にくれ、しかし、大恩ある方々からの命令ですので、駄文が由緒ある本誌に載ることをお許し願います。本当にすみません。

テーマどおりにいくと、私には当然、人に誇ることができるとはありませんし、だからだと今日まで生きて、そして、これからもだからだと人生を過ごすことになるでしょう。これだけには自信があります。

私の座右の銘は「ぼちぼち」です。ルビー・モレノが「月はどこちに出ている」の中で言った、「儲かりまつかあ。」「ぼちぼちでんなあ。」「の」「ぼちぼち」です。ですから、何もかも「ぼちぼち」と言いながらやっています。

さて、私の仕事歴は、次のとおりです。

高校卒業↓無職(アルバイト)↓国立学校(高専含む。)  
↓運送会社↓無職(アルバイト)↓専門学校↓無職(アルバイト)↓私立医科大学↓私立大学(現在に至る)。

今見ても、座右の銘どおりの生き方です。だからだとしています。

以下に、国立学校での勤務以降のことを簡単に記します。

## 一 国立学校時代

私の最初の勤務先は国立大学でした。高校を卒業後、一年間プーターロー、この途中で今はなき国家公務員採用初級試験(行政)に合格し、採用になったのが国立大学でした。

国立大学に勤務している私くらいの年齢で、「どうしても大学職員になりたかった」という人は少数派でしょう。公務員になりました。公務員試験を受け、たまたま採用になったのが国立学校だった、という人がほとんどだと思います。そういう点では、独立行政法人になり、公務員の枠から外されて「だまされたあ。」と思っている人もいます。でも、有権者の多数はそういう政権を選んだわけですから、それはそれで仕方ありません。私はそのような政権を選びませんでしたけど、多数には勝てません。

(一) 医学部附属病院事務部医事課外来係

私の最初の配属は、医学部附属病院事務部医事課外来係というところでした。知る人ぞ知る「医事課」です。ここには五年いました。当時、医事課には五年、という不文律のようなものがあつたようです。もちろん、医事課に配属されない者もいます。医事課は現場ですから、企画のようにはなりません。企画タイプではない、ぼちぼちの者が配属されたのだと思つています。やはり、座右の銘のおりです。

医事課では、レセプト、基金、国保連合会、生食、SM散、ラB、Mトーシ等々、何だこれという単語がたくさん出てきました。そのおかげか、今でも変なところで役に立っています。

当初は手書きでレセプトを書いていました。私は内科系

つじ・ともゆき ● 1962年、石川県生まれ※石川県は「生まれ  
た所」というだけで、愛着は全然なし。石川県がどうなるのが興  
味なし。正確には、日本に全然興味なし。帰省先はバンコクです  
から。●「生きてナンボ」「命(タマ)までかけるものない」「命  
は地球より重い」「まあ、何とかなるさ」をモットーとして、ポ  
チポチ生きましよう。

を担当することが多かったので、毎月一千二百枚程度を書  
いていました。医事課を嫌がる人は多かったので、慣  
れるとこれはこれでラクでした。窓口勤務はありますが、  
レセプトについては、かなり自分のペースで進めることが  
できました。

新人にはベテランが付いて(といっても二、三年、医事  
を担当した人です。私も何度か担当しました)、いろいろと  
教えてくれます。OJTです。私に付いた人は「なるべく  
残業なしで帰る。」ということをもットーにしており、私  
はその影響を今でも受けています。

一度、毎日毎日早々に帰宅するので、ある人(たぶん、  
もう物故者だと思えます。)が、「こいつらはきちんとして  
レセプトを書いているのか」と、私たちが帰宅してから調べ  
たそうです。結果、きちんと書いていることが判明。お仕  
事ですから、当たり前です。

また、当時は親の敵のようにして酒を呑んでいましたか  
ら、よく二日酔いになっていました。これも、かなりの部  
分、自分のペースで仕事をすることができたからです。酒  
に関しては、「どれだけ呑んでもかまわないが、次の日は  
這ってでも遅れずに来い。そしてすぐに帰ればいい。」と  
いう指導を受け、これもその影響が今でも残っています。

医事課嫌いの人が多かったのですが（今はどうでしょうか?）、それでも、医事課の仕事が大学経営に大きく影響することは、医事課嫌いの人でも分かることでしよう。言ってみれば「営業」です。入試広報と同じです。企画だけでは絶対に大学経営は成り立ちません。自分が偉いと思っている奴ほど営業を嫌がるという傾向がありますが、それは違います。そいつらは、自分で儲けることができず、人の稼ぎで喰っている単なる脛かじりのアホオです。

途中で手書きから電算化（この言葉は古いかも。）となりました。さすがにこの時の業務量は多かったです。レセプトについては専門会社に多くを外注しましたが、それでもその確認はしなければいけません。

残業嫌いの私でも、残業時間が月に百時間を超えるようになりました。同僚の中には残業時間が二百時間を超えた人もいました。一日八時間働いて、その後残業が八時間、これが二十五日で残業時間が二百時間となります。しかし、残業代はカットの連続でした。不足分は次の月に回す、と言い含められていました。が、実際は人事異動があると部署が変わるのでその分はチャラ、ということになっていました。年度予算で、年間の残業手当が部署ごとを決まっていたから、このようになるのです。当時は国家公務員だ

だったので、今のように労働基準監督署が入ったことはありませんでした。

電算化の前日は完全徹夜となり、朝六時ころに一度帰宅してシャワーを浴びてから出勤しました。夜は小中学校時代の同級生との宴会があったのですが、その日の二十四時にはダウンしてしまいました。

このような状態が半年ほど続いたのですが、電算化にも慣れ、これもかなりラクになりました。残業もほとんどしなくなり、だいたい、月に三日か四日、夜の九時ころまで残り、それ以外は、他の係で夕刊を読み、そして、五時になるのを待っていた状況でした。いい時代でした。

医事課の時に、二回、文部省への転任が打診されました。一回目は、あまりしつこくはなかったのですが、二回目はかなりでした。昼休み中に係長に呼ばれ、かなり説得されました。午後からの窓口があるので、と伝えても、他の者に行かせ、十五時ころまで説得されました。このときは、同期入職の人が文部省に転任しました。結局は、私に対する説得は不調に終わったわけですが、後年、数回説得されました。これは後に記載します。

で、五年目の一月ころ、いつものように夕刊を読んでみると、医事課長に話しかけられました。

課長 「辻君はもう医事課で何年たつかなあ。」

私 「もおお、分かつているくせに、今さら。」 私ですかあ、この三月で丸五年です。」

課長 「そうか、そろそろ異動だなあ。」

私 「当たり前やんけつ。」 あつ、そうですか。」

課長 「用度とか経理はどうや。」

私 「(えっ、なめとんのか、わしの希望と違うやんけえ。) いやあ、会計系はちよつと。」

今は知りませんが、当時は、「庶務系」、「経理系」、そして「学生系」となっていました。私は毎年の異動希望には「学生系」としていたのです。それなのに……。

## (二) 教養部学生第二係

そして、運命の内示の日を迎えました。教養部学生第二係への異動でした。

内示があった後、同僚のおばさんから忠告を受けました。「教養部にはクーラーがないよ。」学校というのは昔からクーラーがなかったところですが、大学病院にはありません。ですから、大学にはクーラーがあるのだと思っていましたので、教養部がないと聞き、まさかと……。しかし、本当でした。正直、驚きました。当時、教養部の上司からは

「夏は仕事をしなくてもいい。」と言われ、再度驚きました。

学生第二係があるということは、学生第一係があります。事務分掌として第一係は教務関係、第二係は学生関係となっていました。同じ部屋でしたので、そのようなことに関係なく、学部別に担当を分けていました。ですから、私は第二係でしたが、定期試験の時間割も作成していました。私の担当した学部は、工学部、次に教育学部でした。

工学部担当のとき、いつも再受験願いを出す者がいました。不本意入学です。で、再受験先が必ず医学部(他の大含めて)なので、必ず落ちて、そして、授業料を払ってもらって、又は休学して在学するのです。なめたクソガキです。結局は退学する者が多かったです。

また、工学部の建物から飛び降り自殺した者がいて、全然身元が分からず、自殺後の写真が回ってきたことがありました。工学部内なので、工学部生ではないかと。私、写真を見てもだれか分かりませんでした。工学部一年生でした。言い訳をさせてもらうと、工学部生は一年と二年の両方でだいたい千人を超えていたのです。

教育学部担当のときに、ずっと留年している者がいます。何度も連絡してやっと窓口に来ました。授業料未納だ

ったので、払って退学又は授業料未納による除籍を選択させるためです。彼は「退学と除籍はどことが違うのか。」と聞いたので、私は「退学は退職願い、除籍は懲戒解雇かなあ。君が就職するとき、履歴書に退学と書いたとして、その会社から照会がきたら授業料未納による除籍としか返答できない（昔はこんなことが許されていたのですね。ちなみに、警察からの照会も簡単に答えていた大学でした。）、ひよっとしたら、これでその会社の採用はアカンようになるかもしれない。でも、公務員は違うよ。」と伝えました。彼は除籍を選びました。後年、これで、「てめえ、この野郎」ということがありましたが、これも後で…。

毎学期、授業料未納による除籍者が必ず数人おり、私がこの事務を担当していましたが、いつも淡々と行っていました。

そうこうしているうちに、三年がたち、次の異動がありました。

ただ、後年、教養部が軒並み廃止されたのは今でも合点がいきません。この後、オウム真理教事件で「専門バカはだめだ。教養も必要だ。」という話が出たときは、大笑いしてしまいました。日本の教育改革というものは、いつも…。

### (三) 工業高等専門学校

教養部の次は、工業高等専門学校（高専）の学生課教務係でした。当時、大学から高専へは、職位が一つ上になつて異動する、というのが不文律でありましたが、このときからこれはなくなつたようです。確か、大学から三人が異動となりましたが、私を含め、二人の職位は変わらずでした。その後、他の異動をみても、職位の変更はありませんでした。

今思うと、高専時代の仕事が一番楽しく、面白かったです。

高専は小さいながらも一つの学校ですから、直接文部省とのやり取りになります。大学でしたらこうはいきません。例えば、大学でしたら、文部省からの書類を学生部で受け、それを各学部に戻し回答を得て、学生部でまとめ、文部省に提出する、時間だけがかります。面倒です。しかし、高専はこのような面倒がなく、その点ではラクでした。

お菓子を持って、中学校訪問もしました。入試倍率が年々低下し、高専も危機感を感じ始めたころです。

このころ、人事院の研修があり、それに参加させられました。十日ほど連続であり、ずっと名古屋にいました。こ

の研修には各省庁の出先から参加者があり、他のところについて聞くことができ、なかなか有意義だったと記憶しています。名古屋は好きではない街でしたが都会だったので、単館の映画館があり観に行きました。

最終日だったかに、それぞれ発表があり、国立学校の部（高専の部だったか？）の発表者が私で、「国立学校はなかなか辛いのだ。私のいる高専も隣の県にも進出している。隣の学校なんぞどうなろうが知ったのではない、云々。」と発言したところ、他の者から「国立学校が危ないのですかあ。国立はつぶれないでしょう。」と名めた質問があり、私は「アンタんとは潰れんていいねえ。」と答えました。今、これを振り返ると、どちらが正しかったのかは、みなさんご承知のとおりですね。

途中、国家公務員採用Ⅱ種試験（行政）に合格しました。このころはバブルの時なので、合格者はかなり多かったはずですが。当時の学生課長に「文部省に行かないか」と言われましたが、これもお断りしました。

県議会選挙のときに、某候補者後援会への入会を誘いに（しかし、命令口調）、退職した大学の元幹部が来ました。何でも、大学移転のためだと…。どこの馬の骨かも分からない奴は知ったことではないので、「私はお断りしま

す。」と言ったところ、その元幹部はとても驚いていました。「そんなことを言って大丈夫か。」と心配してくれた人もいました。

高専には二年半在籍しました。推薦入試の準備をしていた九月に、私が採用された大学の人事課の課長補佐、係長が来ました。私は「だれか大学に異動するんだなあ、あの係長かなあ。」と考えていました。数日後、（私にとって二代目の）学生課長が「来週、ちょっと呑みに行こう。」と言うではないですか。「あつ、異動はおれかあ。」

翌週、課長と乾杯の前に、「私はどこに異動ですか。」と聞きました。課長は驚き、「なぜ、分かった。」かと。先週、大学の人事課が来た話をしました。工学部学生係への異動でしたが、私は「イヤだ。」と言いました。高専が気に入っていたのと、大学は高専に対して傲慢なところも強く感じていましたし、大学に「戻る」なんてしたくなかったのです。

しかし、課長は「公務員は異動に対して拒絶する権利はない。」というのです。私もそうだと分かっていたのですが、でも、「イヤだ」と言いたかったのです。課長には「大学採用者はみんな大学に戻りたいと言っているに、君はなぜ？」と聞かれました。私は「大学は何せイヤだ。」

と言いましたが、当然、それは認められることはありません。

「そのころから国家公務員に対して「夏季休暇」が認められました。私は九月に取る予定をしていたのですが、この異動でチャラにならざるをえませんでした。人生チャラが多いです。」

#### (四) 工学部学生係

その年の十月に工学部学生係に異動しました。定員は臨時増募もあり、五百人を超えていた学部でした。毎日、遅くまで残業の連続でした。ここでも、よく呑みました。

前述した教養部のときの「てめえ、この野郎」ですが、工学部に異動した初日に「辻さん、ごぶさたしています。」などと言う奴がいました。私は「だれだ、お前は」と思っていたのですが、こいつがこの「てめえ、この野郎」でした。「公務員試験と除籍は関係ないよ。」という私の発言を真に受け、国家公務員採用Ⅱ種試験に合格し、大学に採用された、とのことでした。他の省庁からも勧誘があっただろうに、なぜ大学に、しかも自分を除籍した大学に……。しかし、こいつは、私の言うことをいつも聞いてくれましたので、この点はラクでした。いい奴でした。

他大学と同様、工学部の出願は年々減少し、ある年、某学科の後期日程の受験者数が定員ちょうど、次の年は一人足りない、ということがありました。ほとんどが前期日程で入学手続きをするので、後期日程は出願が多くても、実際に受験する者はとても少いのです。教養部の時も、入学式が終わっても、追加合格を出していた学部もありました。国立（しかも、旧一period校、もう一つ言うと、旧六。）といえ、これはなかなかの時代になったなあ。

旧六でこの体たらくなのに、俗に言う「駅弁大学」というのは残るのかしら、とも考えていました。まっ、今では、昔はバカにしていた新設の医科大学に救ってもらい、何とか息をしている大学になったのではないだろうか。これは、良かったのか、悪かったのかは、正直分かりませんが、工学部生活も三年半経ち、次に異動しました。

#### (五) 学生部学生課総務係

次は、本部でした。学生部学生課総務係というところです。学生部の筆頭課筆頭係という部署です。学生部にはペーペーが私を含めて三人だけでした。そして、その内の二人がこの係にいました。

私は、工学部にいた時は、学生部への異動はないと思っ

込んでおり（この自信はどこからきたのかは、今でも分かりません）、「学生部はなめたことばっかりしやがってっ。」とか「工学部は学生部なんかとは違うんだわ。一緒にしてもらっては困る。」などと行っていましたが、この思い込みも空しく、簡単に異動させられてしまいました。人は、おとなしく喋っていた方がいいようです。

筆頭課筆頭係というのは、つまるところ、「何でも屋」ということになります。これが面倒でした。「他の課係に属さないこと」というのが事務分掌にありましたから。これは、皆さんも経験のことでしょう。この分掌の意味がどれだけ面倒か。

時々、文部省から、本日十時までに回答せよとの調査書類が夜中にファックスで入っていました。それを朝、各学部へ転送し、電話の前で頭を下げながら、学部の担当係長にペーパーの私がお願ひするのです。やっと回答してもらったものをまとめ、そして文部省に送ります。高専だったら、途中のお願ひがなくラクだったのに……。だいたい、夜中の二時にファックスを送る方が間違っているのではないのでしょうか。しかも、本日十時までに回答とは……。

時々、所用で東京に行くときには、高専時代の（私にとって初代の）学生課長に連絡してごちそうになつていまし

た。この人は上級職でして、高専のときから「文部省に転任しないか」と、かなりお誘いを受けていました。当時、転任の年齢制限が確か二十七歳までとなつており、私はそのことを指摘したのですが、「そんなことは私が何とかするから」と。キャリアは違うんだなあ、と覚えがあります。何とかこのお話はお断りしました。

高専のときも、他のノンキャリアの課長は十万円の追加予算のために五万円の旅費を使っていたのに、この人は、電話一本で依頼し、追加の予算が追加されたこともありました。

この人には、今でも時々ご馳走になっています。ありがとうございます。

ただ、生まれた所が嫌いだつたので、他の都道府県への異動希望を表明したところ（「自己申告書」といったものに書いた、ということですが）、人事課長が飛んで来まして「おしにまかせておけ。」と。私は「はあ。」と答えました。

で、数日後、人事課長が持ってきたのは、なんと「大学入試センター」でした。なめとんのかっ！

私、昔から大学入試センター試験が大嫌い、こんなもんに大学の入試が左右されて、大学人としての矜持はないのかと思つていましたから（今でもそうです）、当然これ



に対しては言を強くして「NO!」でした。人事課長は、私のこのクソ組織に対する強い反感に驚いたようです。しかし、こんなところへの異動を提示するとは、私もなめられたものでした。

ここには、一年と十か月いました。十六年弱の国立学校勤務がここで終わりました。

## 二 運送会社時代

特筆することはありません。ここの専務は総務全般を担当しており、私を自分の後任と考えていたようですが、途中で彼が辞めてしまい、私もしばらくして辞めました。一年半ほどいたでしょうか。

## 三 無職時代（一）

約半年の無職でしたが、これも特筆することはありません。倉庫でアルバイトをしていました。運送会社のとときにフォークリフトの免許を取らされたのですが、これが役に立ちました。時給が百円高かったのです。

## 四 専門学校時代

新聞の求人欄を見て応募したところ、運よく採用となりました。ここで、「学校屋」ということが身に付きました。私に「集めてナンボ」という考えを植えつけてくれたのはここです。

学生募集と校内の総務全般を担当していました。県との折衝もありました。

地域が一番校でしたので、私が在職中は、定員割れは一度もありませんでした。もちろん、定員は割ってはいけないうい、という意識も十分に持っていました。私らの給料は、授業料から出ているというのは、絶対に意識しないといけません。

専門学校と少し外れますが、不思議なのは、大学の新設学部は分野によつては一年目の定員は割るのは仕方がない、という考えがあることです。一年目から定員を割ると、二年目以降、ほとんど間違いなく同様の状況になると考えられないのでしょうか。何を考えているのだろう。

当時は、当たり前ですが、「下手な大学よりは専門学校の方がいいよ。」と言って募集をしていました。この考えは、大学に勤務している今でもそんなに変わっていません。

そして、定員を割っているような学校に行つてはいけな  
いとも強く言っていました。

つまり、「定員を割ると授業料収入が少なくなる」↓「教  
育にはカネがかかので、収入が少なくなると良い教育がで  
きなくなる」↓「良い教育を受けられないと就職できない」  
↓「就職が悪い学校には入学者が少なくなり、定員を割る」  
といった負の循環となる、ということです。これは入学者希  
望者には当然ですが、特に保護者に強く訴えていました。

「学校屋」という言い方に強く反発する人もいます。し  
う。人の考えはそれぞれですから、それはかまいません。  
しかし、私はこの「学校屋」というのに誇りを持っていま  
す。魚を売ってメシを喰うのは魚屋、野菜を売ってメシを  
喰うのは八百屋、では、教育をしてメシを喰うのは？ 同  
じでしょう。学校は違うんだ、というのは驕りです。自分  
たちの組織はそんなに立派でしょうか。

そして、ここには四年と四か月いました。

## 五 無職時代 (二)

このときの無職は一年二か月続きました。今という派遣  
でたらだらと過ごしました。

## 六 私立医科大学時代

職安のインターネットで見つけました。他にもう一つ、  
病院が別に経営している看護・理学療法専門学校からも  
話があり、本当は、専門学校の方がいいと考えていたので  
すが、なかなか理事長と会えず、先に決まった医大にしま  
した。私は高卒ですが、国家公務員採用Ⅱ種試験に合格し  
ていたので、大卒扱いにしたと人事課の人に聞きました。  
経歴も考慮されたのかもしれませんが。

中途採用の同期は私を含めて三人いました。一人は市場  
から、一人は都市銀行から、そして私です。結局、全員が  
退職しました。都市銀行出身者と私は一回の面接だけだっ  
たのですが、市場出身者は筆記試験、面接も二回有つたら  
しく、彼は「ひどい」と言っていました。

私は国立学校や専門学校といった「他の学校」の経験者  
なので、医大の若い奴から「他の学校はどうですか。」と  
よく聞かれました。私の答えはいつも「医大は潰されなく  
ていいよ。」でした。潰れないではなく「潰されない」で  
す。医大は附属病院を持たないといけません、どこの大  
学病院でも地域の拠点病院ですから、潰すことは難しいか

らです。

だいたい、「医大を「大学」のカテゴリーに入れるのが間違いです。医大は「医科大学」のカテゴリーとして扱うべきです。「大学」と「医科大学」は、あまりにも条件が異なります。

そのおかげ（せい？）かは分かりませんが、余裕しゃくしゃくだったと思います。特に、四十代後半のプロパーがくだらないことに時間をかけていました。彼は私が国立学校に勤務していたことを知っていましたので、私も同様だと思っただけです。しかし、こんなことを国立学校でやっていたら、怒鳴られていたでしょう。他の医大は知りませんが、私の勤務した医大は「官僚より官僚らしい」「（実際は違うけれど）国立大学より国立大学らしい」体質でした。

同期の二人はこんなことが続き、いやになり辞めたのです。私は「医大は潰されないのが、仕事は仕事で割り切つて辞めない方がいい。」とは言っていたのですが、先に市場出身の人が辞めました。次に私が、そして都市銀行出身の人が続きました。

私がメインで担当していた大学院看護学研究科の学生は、看護師として働きながらの人がほとんどで、研究科が学生として求めているのもそういう人たちでした。看護師

養成施設（大学、短大、専門学校）を卒業し、数年働くといろいろと仕事上の疑問が出るだろうと、それから入学してください、ということでした。拒みはしませんが新卒をあまり求めることはしませんでした。ほとんどが女性でしたが、私が担当していたときに、男性は二人入学しました。

私は彼らをとてども尊敬していました。看護師の仕事しながら大学院とは……。かなり辛かったはずですが。私は彼らに対して、（成績は当然別ですが）できるだけの便宜を図るようにしました。

例えば、レポート提出の締切時刻はだいたい十七時ということが多かったのですが、担当教員は次の日に取りに来ていました。それで、「レポートは私あてにメールで提出してもいいです。私がレポートを印刷してホチキスで止めて先生に渡します。しかし、私は十七時以降、メールは見ません。翌朝メールを見て印刷します。でも、内容は当然見ないので、誤字脱字は注意してね。」と。これで、締切りが十四時間ほど延びるのです。彼らには締切りが延びるとは言いませんが、ニュアンスは分かりますよね。まあ、ニュアンスが分かるように伝えていたのですが。

なかなか修了できず、昨年の九月に三年半で修了した人がいました。彼女とは入学からの付き合いでして、私はもう

医大を辞めていましたが、学位記授与式後に名古屋市営地下鉄藤が丘駅近くあるタイ料理屋で、修了済みの人、在学生たちとお祝いの宴会をしました。

当時、看護学研究科に「専門看護師」の制度を立上げるということで、担当となりました。申請業務が終わり、結果を待っている時に、学校業界（この表現も嫌われるかもしれませんが）の師匠に誘われたので、専門看護師の認定を置き土産にし、転職することを決めました。

十一月の半ば過ぎに師匠からのお誘いがあったのですが、私は医大には閉塞感をかかり感じていましたので、パツと決めました。年内に退職を目論んでいたのですが、週の半分は年休を使い仁愛大学、半分は医大でいい、三月までは医大に在籍している、ということ、結局は年度末まで医大に勤めました。三月の教授会後に他の辞める人も含めて、宴会兼送別会があり、私は挨拶で「また、学校屋に戻ります。」といった覚えがあります。

## 七 仁愛大学時代

二〇〇八年四月に仁愛大学に転職しました。新学部設置のために誘われたので、大学の総合企画室に配属となり、

そして法人の設置準備室に併任（併任辞令は出ていないのに名刺はあり。）となりました。前任者が急に退職し、しばらく設置事務が止まっていたのだそうです。

途中は面倒なので（設置はこの大学も同様でしょう）省きますが、何とか文部省（私、なかなか「文部科学省」というのが身に付きません。「文科」という言い方もです。）からの設置認可を得て、教職課程もOKのよう（同僚に笑われているのですが、正式な紙がないので、私はまだ半信半疑なのです。）、「児童厚生員も保育からOKがあれば認定する、そして、保育士養成もOKという近畿厚生局長からの公印入りの内示通知（公印を押しながら、内示というのがよく分かりません）がきました。この間、管理栄養士と栄養士の実地調査があり、少し、ホツとしています。

設置について、m大のT大将を始め、いろいろな人にお世話になりました。管理栄養士については、U氏に具体的なご助言をいただきました。ありがとうございました。

私は田舎が嫌いです。雪も嫌い、寒いのも嫌いです。しかし、ここに転職したのは、師匠からの誘いだからです。もし、彼から沖繩に來い、となったらそこに行つたでしょう。

間もなく、仁愛大学に転職し一年になろうとしています。

昨年十月に（設置準備室併任ですが）大学総務課に異動となりました。

本学はかなり田舎にある人間学部だけの単科大学ですが、きちんと学生を集めている大学です。ほとんどの学生からも挨拶をされ、自分で言うのも何ですが、いい大学だと思います。

本年四月には新学部の「人間生活学部」ができ、一期生が入学してきます。管理栄養士養成施設の初年度は軒並み定員を割っているようですが、仁愛大学は今のところ、大丈夫だと感じています。ぜひ、仁愛大学をよろしくどうぞ。

## 八 最後

今考えても不思議なのは、私は学校が大嫌いだったのに学校で仕事をしていることです。

高校は地元で一番程度の悪い普通科で、一年から二年への進級が本当はダメだったのに野球部ということでOKとなり、これに関しては、保健に赤点を付けた保健体育の教員（名前は覚えていません。）に呼び出されました。ただ、保健の授業は、自分のノートを読み、それを生徒に写させるだけというクソ授業でしたので、こんなものに何点だろ

うが、今でも後悔はありません。ただ、二年に上がれなかつたら中退だなあ、とガキの頭で考えていました。何を仕事にしようか、とも考えていました。

そして、卒業時の成績が下から五番以内というのは確信しています（何せ、五段階評価で二・六ほど。成績証明書の各科目には「二」しか見えません。）。もし「高校卒業統一試験」のようなものがあつたら、絶対に高校中退です。

また、三年生の時には、単車で自宅謹慎を受けました。これは、今の知識・知恵があれば徹底的に闘うのにと。大人になることはとても大切なことです。ガキはやはり頭が悪いです。

そして、公務員試験に受かり、（このような体験をしていたのに）たまたま大学に採用となりこのような人生を送っているのです。大学の採用でなかったらどうなっていたのかは、もちろん、分かりません。初級試験に合格したときは、大学以外に北陸地方建設局、職業安定所から誘われました。Ⅱ種試験のときは、高専に在職中でありながら法務局、名古屋矯正管区から誘われました。他に、石川県警察官と入国警備官にも合格し、採用内定を受けていました。が、初めから行く気がありませんでした。警察か入国警備官のどちらかで仕事をしていると、帰省ができないような

気がします。私の帰省先はバンコクですから。

前述しましたが、私くらいの年齢の国立学校職員は何があってもこの職業に就きたかったのではなく、たまたま採用されたというのがほとんどのはずです。ですから、私は現在、大学職員という職業にかなりの人気があるのは、完全には理解できません。残業も多いし、職種がいろいろと分かれているので、関係がなかなか面倒だし、と思うのです。しかし、人の天職というのは分かりませんので、希望する人はぜひ、「学校屋」という意識を持って大学職員になってください。

ここまでこのようなくだらない駄文をお読みになっていただき、ありがとうございます。

Khopun khrahi

